

学校教育目標		視覚障がいのある児童生徒一人一人の人権を尊重し、障がいの特性等に応じた教育を推進するとともに、自立に向けた意欲の向上と知識・技能の習得を図る。 (ミッション) 視覚障がいのある児童生徒への配慮と工夫を大切にしながら、社会的自立に向けて適切な教育環境を提供する。 (キーワード)「つながる」	今年度の 重点目標		① 学習指導の充実 ② キャリア教育の推進 ③ 人と関わり合う児童生徒の育成 ④ 視覚障がい教育の啓発と発信 ⑤ 安全・安心な環境づくり			
年 度 当 初								
評価項目	部科・分掌	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	評 価 基 準	経過・達成状況	評価	次年度への方策
① 学習指導の充実	教務部	○ 今年度、個別的教育支援計画が新様式となり、年間学習指導計画と個別の指導計画が一体化した形での指導計画も新たに運用が始まっている。 ○ 年間計画の中で、今までよりも個別のねらいが明確化されている。	○ 教科・領域のねらいや内容をおさえつつ、個別のねらいに迫る学習が展開されている。 ○ 授業運営の年間の流れ(評価・変更点・課題・改善点を含む)が個別のねらいの評価とともに、指導計画の中に記録とともに残っている。	○ 長期目標(3年)達成へ向けての今年度の目標を話し合いによって決定し、授業担当者等へ伝える。 ↓ 個別のねらいを明記した年間学習指導計画をたてる。 ↓ 各単元等、短いスパンで評価・改善をし、次の計画へ反映させることを周知する。(参観ウィークの相互参観等、授業や児童・生徒の様子について伝え合い、指導に生かす) ○ 指導計画は共有ファイルとする。 ○ 校長・教頭より指導助言を受ける。	A: 指導計画・支援内容に十分改善や工夫がされている。 B: 指導計画・支援内容に改善や工夫がされている。 C: 指導計画・支援内容に一部改善や工夫がある。 D: 指導計画・支援内容への改善がない。			
	教育研究部	○ 視覚障がいのある児童生徒一人ひとりの特性に合わせて、ICTを含めた教材・教具の工夫をしながら授業実践を行っている。 ○ 一方、今年度10名以上の教職員の異動があった。改めて、視覚障がい教育の専門性の維持・向上への取り組みが必要な状況である。	○ 教職員は視覚障がい教育の専門性向上のために研修や授業参観、実践研究に取り組んでいる。また、それらについて共有するとともに、一人一人の特性に合った指導実践に生かそうと取り組んでいる。	○ 年間を通して研修日を設定し、計画的に研修を進め、授業実践に活かす。 ・グループ別研究:各グループのテーマを設定し、具体的な指導方法や授業づくりについて研究を深める。 ・各種研修の改善:ICTの効果的な活用、自立活動、教材教具、歩行など分野別に実施する。職員間での専門性の差を活用した研修形式を計画する。 ・研修報告:グループ別研究、外部での研修、研究会での発表研究について報告会を開き共有する。	≪ 研修・研究を実践して成果を感じた職員の割合で評価 ≫ A: 3分の2以上の職員 B: 半数以上3分の2未満の職員 C: 3分の1以上半数未満の職員 D: 3分の1未満の職員			
	支援部	○ ICTを活用した学びの支援事業の3カ年を終え、機器は充実しており、教職員のICT活用スキルも高まってきている。今年度は、児童生徒への活用の充実が期待される。	○ 児童、生徒がICTを活用することにより、学習の効果が上がり、力をつけることができる。	○ 定期的に活用方法の提案を行ったり、ICTサポーターから助言をもらったりし、ICT機器を活用できる環境を整えることで、学習効果をあげる。	≪ 児童生徒にアンケート実施 ≫ ＊口頭での聞き取りも可 A: 児童生徒の全員がICT機器を活用することで学習効果があがったと答えている。 B: 80%の児童生徒がICT機器を活用することで学習効果があがったと答えている。 C: 50%の児童生徒がICT機器を活用することで学習効果があがったと答えている。 D: 30%の児童生徒がICT機器を活用することで学習効果があがったと答えている。			
	保健医療科	○ 生徒の実態に合った適切な学習手段・方法を確立し、学習内容の理解定着を図ることが課題である。	○ 自分に合った効率的な学習方法を確立し、自主的・積極的に学習に取り組むことで、専門的知識が定着している。	○ 生徒の見え方や課題に応じた学習手段・方法を確立するために、授業内容・教材・指導法を工夫する。	A: 生徒の課題に応じた適切な指導を行うことで、学習手段が確立され、十分な学力向上につながっている。 B: 生徒の課題に応じた適切な指導を行うことで、学習手段が確立されている。 C: 生徒の課題に応じた適切な指導を行うことで、学習手段が確立されつつある。 D: 生徒の課題に応じた適切な指導を行うことができず、学習手段が確立できなかった。 E: 生徒の課題を的確に把握できておらず、適切な指導ができていない。			
	専攻科	○ 生徒は全員が中途視覚障がい者で、入学時には自己の見え方に合った方法で効率的に学習する手段や方法を持っておらず、また、確立までに長期間を要することもある。	○ 生徒は、視覚の状況等に合った学習手段を身につけ、適切な教材を用いながら、見通しを持って、継続的に効果的な学習に取り組んでいる。	○ 視覚の状況、視覚補助機器の活用技能に応じて自主学習を効率的・効果的に行えるよう、科目担当者が共通理解のもとに連携して適切な教材教具の提供、授業作りを行う。 ○ 国家取得に必要な基礎的、基本的学力の育成を図るために、小テストを頻繁に行って学習内容の定着度を適切に把握し、これに応じた教材の変更、授業改善など適切な支援を連携して行う。	≪ 生徒へのアンケートによる評価 ≫ A: 視覚の状況、学習の状況の丁寧な確認、実態に即した教材の提供、授業の工夫が、どの科目においても十分になされ、自分に合った学習方法で効率的・効果的に基礎的・基本的知識の定着のための自主学習に取り組んでいる。 B: 視覚の状況、学習の状況の丁寧な確認、実態に即した教材の提供、授業の工夫が8割以上の科目でなされ、自分に合った学習方法で効率的・効果的に基礎的・基本的知識の定着のための自主学習に概ね取り組んでいる。 C: 視覚の状況、学習の状況の丁寧な確認、実態に即した教材の提供、授業の工夫が6割以上の科目でなされているが、自分に合った学習方法で基礎的・基本的知識の定着のための自主学習に取り組めていない科目が複数ある。 D: 視覚の状況、学習の状況の丁寧な確認、実態に即した教材の提供、授業の工夫が多くの科目でなされず、自分に合った学習方法で基礎的・基本的知識の定着のための自主学習にほとんど取り組めていない。			
② キャリア	中学部	○ 盲学校卒業後の進路について、段階的に学習を進めているところである。 ・総合的な学習の時間、自立活動、作業学習を通してキャリア教育を推進しており、昨年度は職場見学や体験学習も行った。 ・校内では、「ワイワイお助け隊」として、ボランティア活動を継続して行い、活動の意義や自分の役割を理解し、意欲的に取り組んでいる。 ・しかし、校外での就労に関する体験活動はまだ少ないため、実際の場面での具体的なイメージを十分につかめていない。	○ 教師の支援を受けながら体験的学習(活動)や情報収集を行い、盲学校卒業後の過ごし方や、就労に関して一つでも具体的なイメージを持っている。	≪ 重複障がい学級 ≫ ○ 作業学習や総合的な学習の時間、自立活動、学級活動、産業現場等における実習、わくわく鳥盲で、就労につながる学習を積み重ねるとともに、盲学校卒業後の進路について情報提供をおこなう。その際には、体験的学習を多く取り入れるように配慮する。 ○ 校内ボランティア活動をする中で人から感謝され、働く喜びを感じられるようにする。	A: 卒業後の過ごし方や就労につながる体験学習等に意欲的に取り組み、働く喜びを感じている。 B: 卒業後の過ごし方や就労につながる体験学習等を楽しみながら取り組んでいる。 C: 卒業後の過ごし方や就労につながる体験学習等に興味を示し始めている。 D: 卒業後の過ごし方や就労につながる体験学習等にほとんど参加できていない。			
				≪ 単一障がい学級 ≫ ○ 総合的な学習の時間や自立活動、わくわく鳥盲(職場体験)を中心に、卒業後の生活や就労について具体的なイメージを持って学習できるように、ICTを活用して、具体的な映像や資料の提示したり、生活スケジュールを話し合いながら計画したりする。その際には、本人の希望や状況をもとにして、生徒と共に将来像を考えていくことを大切にする。	A: 卒業後の過ごし方や就労について具体的なイメージを持ち、意欲的に進路学習や情報収集をしている。 B: 卒業後の過ごし方や就労について具体的なイメージを持ち、進路学習や情報収集をしている。 C: 卒業後の過ごし方や就労について具体的なイメージを持ち始め、進路学習や情報収集をしようとしている。 D: 卒業後の過ごし方や就労について具体的なイメージが持てず、進路学習や情報収集をしていない。			
		○ 進路に関する情報を保護者と共有することにおいては、懇談等の機会をとらえて話し合いをしているが、各家庭によって差があり、十分には行えていない。	○ 盲学校卒業後の過ごし方や進路について保護者との情報交換を計画的に行っている。	○ 懇談では就労に向けて育てたい力と支援について話し合う。 ○ わくわく鳥盲や産業現場等における実習の様子について、保護者に見学をしてもらったり、体験後の職場懇談会と一緒に参加してもらったりして、情報を共有する。	≪ 保護者について ≫ A: 子どもの進路に関する情報を熱心に聞き、実習の見学や職場懇談会にも積極的に参加している。 B: 子どもの進路に関する情報を興味を持って聞き、実習の見学や職場懇談会にも参加している。 C: 進路に関する情報や実習の見学、職場懇談会に参加の意思を持ち始めている。 D: 進路に関する情報や実習の見学等自体に興味を持たず、必要感も感じていない。			

(資料2)

平成28年度 学校自己評価

鳥取県立鳥取盲学校

学校教育目標		視覚障がいのある児童生徒一人一人の人権を尊重し、障がいの特性等に応じた教育を推進するとともに、自立に向けた意欲の向上と知識・技能の習得を図る。 (ミッション) 視覚障がいのある児童生徒への配慮と工夫を大切にしながら、社会的自立に向けて適切な教育環境を提供する。 (キーワード)「つながる」	今年度の 重点目標	① 学習指導の充実 ② キャリア教育の推進 ③ 人と関わり合う児童生徒の育成 ④ 視覚障がい教育の啓発と発信 ⑤ 安全・安心な環境づくり				
年 度 当 初								
評価項目	部科・分掌	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	評 価 基 準	経過・達成状況	評価	次年度への方策
② 教育の推進	普通科	○ 生徒は、望ましい挨拶や食事の仕方など生活の力を身につける学習に取り組んでいるが、まだ十分とはいえない。 ○ 職員は、保護者向けに進路についての情報提供をしており、保護者も生徒の進路についての意識はあるが、まだ、具体的ではない。	○ 生徒は、望ましい挨拶や食事の仕方など生活の力が身についた。保護者は、見学や実習を複数回行い、希望の進路選択ができた。	○ 生徒は卒業後の生活に必要な力を実習や学習活動を通してつける。 ○ 進路指導主事と連携し、保護者に進路情報の提供や懇談を行い、保護者と一緒に施設見学や体験、実習をし、進路決定の資料とする。	A: 生徒は望ましい挨拶や食事の仕方を自分からしている。実習をして、保護者の希望通りの進路にすすめた。 B: 生徒は望ましい挨拶や食事の仕方を声掛けやうながしを受けてしている。実習をして、ほぼ保護者の希望通りの進路にすすめた。 C: 生徒は望ましい挨拶や食事の仕方を身体介助を受けてしている。実習をして、保護者の希望通りの進路先につながった。 D: 生徒は、望ましい挨拶や食事の仕方を強い促しを受けてしている。実習をしたが、進路先につながらなかった。			
	専攻科	○ 職場見学・職場体験や進路情報の提供、専門家による講習会等を通じて進路意識の高揚に動いているが、具体化が進まず、進路を意識した学習目標の設定、専門性を高めようとする取り組みにつながっていない。	○ 生徒は体験活動や生徒同士の関わりを通して、資格取得や進路、専門性について強く意識し、それらの実現に向けて主体的に取り組んでいる。	○ 進路や理療の専門性を強く意識させて主体的な学びに導くため、生徒の関心に応じた進路体験学習、専門家から実技を含め直接学ぶ活動、生徒同志が関わり学び合う活動を実施する。 ○ これらの活動による進路や理療の専門性についての意識の変容に即して、更に情報提供や体験の場の設定等を行い、学習を深める取り組みを支援する。	≪ 生徒へのアンケートによる評価 ≫ A: 様々な進路学習を通じて、進路目標や進路を具体化するための方策が定まり、目標達成のための活動や専門性を高める学習に主体的に取り組んでいる。 B: さまざまな進路学習を通じて、進路目標や進路を具体化するための方策がおおむね明確になってきており、進路決定とその職の専門性を意識しながら学習に取り組んでいる。 C: 進路目標や進路を具体化する方策を考えるための情報提供や体験活動が実施されてはいるものの、その内容や回数が十分ではなく、卒業後の進路を意識した発展的な学習にまでは至っていない。 D: 進路目標や進路を具体化する方策を考えるための情報や体験活動が極めて不十分であり、卒業後のイメージが持てず、意欲的に学習に取り組むことができていない。			
	キャリア教育部	○ 学習や生活全般にキャリア教育学習プログラムが活用されているがまだ十分とは言えない。	○ キャリア教育学習プログラムが児童生徒の学習や生活の指導に活用された結果、キャリア発達に関する諸能力において児童生徒の成長した様子が見られる。	○ 児童生徒のキャリア発達を促すために、キャリア教育学習プログラムの各領域の視点を個別的教育支援計画に取り入れ、学期ごとの評価を行い、キャリア発達の段階を共通理解して指導する。 ○ 全職員でキャリア教育研修を行い、キャリア教育学習プログラムの効果的な活用方法を考える。	A: 個別的教育支援計画に取り入れたキャリア教育学習プログラムのすべての領域で能力が向上している。 B: 個別的教育支援計画に取り入れた児童生徒のキャリア教育学習プログラムの80%の領域で能力が向上している。 C: 個別的教育支援計画に取り入れた児童生徒のキャリア教育学習プログラムの50%の領域で能力が向上しつつある。 D: 個別的教育支援計画に取り入れた児童生徒のキャリア教育学習プログラムの30%の領域で能力が向上している。			
③ 人と関わり合う児童生徒の育成	小学部	≪ 言語活動の充実 ≫ ○ 質問に対して答える力や、自分の思いや考えを伝えたいという意欲が高まってきた。しかし、説明不足で相手に伝わらなかったり、文章表現が限られたりする。	○ 相手や目的に合わせて必要な内容を入れて、分かりやすく伝えることができる。	○ 学習中や帰りの会で振り返りの活動を継続するとともに、国語や自立活動を中心に文章表現の学習を設定する。	A: 相手や目的に合わせて分かりやすく伝える力が定着している。 B: 相手や目的に合わせて分かりやすく伝える力につながっている。 C: 相手や目的に合わせて分かりやすく伝える力につながりつつある。 D: 相手や目的に合わせて分かりやすく伝える力を引き出せていない。 E: 相手や目的に合わせて分かりやすく伝える力につながっていない。			
		≪ コミュニケーション ≫ ○ 友だちとの関わりを楽しみ、相手の気持ちに寄り添う声かけが増えてきた。しかし、話をしている人の方を見ていなかったり、答え方が分からなくて返事をしなかったりすることがある。	○ 相手を見て話を聞き、返事をしたり分からない時に質問をしたりすることができる。	○ コミュニケーションに関する学習の機会を設けるとともに、必要に応じて教師がモデルを示したり、声かけをしたりする。	A: 話を聞いて反応する力が定着している。 B: 話を聞いて反応する力につながっている。 C: 話を聞いて反応する力になりつつある。 D: 話を聞いて反応する力を引き出せていない。 E: 話を聞いて反応する力につながっていない。			
		≪ 交流及び共同学習 ≫ ○ 同じ集団の中で学習の機会を積み重ねており、大きな集団の中でも臆すること無く活動できているが、会話などのやり取りに課題が見られる。	≪ 重複障がい学級 ≫ ○ 自分から挨拶をしたり、友達に話しかけたりする。	○ 状況説明をして話しかけるタイミングを伝えたり、児童の好きなことや得意なことを取り上げてやり取りのきっかけを作ったりする。	A: 児童が自分から挨拶をしたり、友達に話しかけたりしている。 B: 相手の声かけを受けて挨拶をしたり、友達に話しかけたりしている。 C: 教師の声かけを受けて挨拶をしたり、友達に話しかけたりしている。 D: 教師と一緒に挨拶をしたり、友達に話しかけたりしている。 E: 教師の支援を受けてもできない。			
			≪ 単一障がい学級 ≫ ○ 大きな集団の中で、自分から友達に挨拶をしたり、話しかけたりして会話を進めることができる。	○ 休憩や給食の時間を中心に、児童が友達に話しかけやすくなるように、雰囲気作りをしたり、一緒に会話に入ったりする。	A: 児童が自分から挨拶をしたり、友達に話しかけたりして会話を進めている。 B: 相手の声かけを受けて挨拶をしたり、友達に話しかけたりして会話を進めている。 C: 教師の声かけを受けて挨拶をしたり、友達に話しかけたりして会話を進めている。 D: 教師と一緒に挨拶をしたり、友達に話しかけたりして会話を進めている。 E: 教師の支援を受けても、できない。			
	指導部	○ 児童生徒会の企画運営には職員も深くかかわった体制で進めているが、児童生徒会行事の企画運営に全員が参加することが困難な場合も見られる。	○ 全ての児童生徒会行事の企画・運営に生徒全員が参加し、主体的に児童生徒会活動に関わることができる。	○ 児童生徒会行事に向けた話し合いの場を設定し、児童生徒同士の会話の中で行事の企画立案ができるよう働きかける。 ○ 児童生徒会行事の運営に生徒が積極的に関われるよう、役割を明確にする。	A: 計画している児童生徒会行事の全てを児童生徒が自主的に企画・運営し、児童生徒全員が行事に関わっている。 B: 計画している児童生徒会行事の8割程度を児童生徒が自主的に企画・運営し、大半の児童生徒が行事に関わっている。 C: 計画している児童生徒会行事の半数程度を児童生徒が自主的に企画・運営し、多くの児童生徒が行事に関わっている。 D: 児童・生徒が自主的に企画・運営した児童生徒会行事がほとんどなく、児童生徒会活動に関わった児童生徒もごく一部に限られている。			
④ 視覚障がい教育の啓発と発信	支援部	○ センター的機能の充実を推進してきたが、福祉の分野との境界線がはっきりせず学校として関係機関の要望を全て満たすことが負担になってきている。また、教職員の異動に伴い、担当するための専門性の維持が難しくなってきた。	○ センター的機能としての、目的を明確にし内容を見直すことで、合理的な運営を行い、視覚障がい教育の理解啓発が進んでいる。 ○ 教育研究部と連携して、専門性向上を推進している。	○ 要請を受けてから、実施までの流れ等をシステム化し、合理的に運営する。 ○ 職員研修において、支援部に属している資料や補装具・補助具・日常生活用品等の提供及び貸し出しを行う。	A: 関係機関からの要請に対してすべてシステムにそって運営できている。 B: 関係機関からの要請に対して8割はシステムにそって運営できている。 C: 関係機関からの要請に対して5割はシステムにそって運営できている。 D: 関係機関からの要請に対して3割ほどしかシステムにそって運営できなかった。			
					A: すべての職員研修(支援部が関係する)で専門性向上につながるように、工夫した資料等の準備ができている。 B: 8割の職員研修(支援部が関係する)で専門性向上につながるように、工夫した資料等の準備ができている。 C: 5割の職員研修(支援部が関係する)で専門性向上につながるように、工夫した資料等の準備ができている。 D: 3割の職員研修(支援部が関係する)で専門性向上につながるように、工夫した資料等の準備ができている。			

(資料2)		平成28年度 学校自己評価			鳥取県立鳥取盲学校			
学校教育目標		視覚障がいのある児童生徒一人一人の人権を尊重し、障がいの特性等に応じた教育を推進するとともに、自立に向けた意欲の向上と知識・技能の習得を図る。 (ミッション) 視覚障がいのある児童生徒への配慮と工夫を大切にしながら、社会的自立に向けて適切な教育環境を提供する。 (キーワード)「つながる」		今年度の 重点目標	① 学習指導の充実 ② キャリア教育の推進 ③ 人と関わり合う児童生徒の育成 ④ 視覚障がい教育の啓発と発信 ⑤ 安全・安心な環境づくり			
年 度 当 初								
評価項目	部科・分掌	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	評 価 基 準	経過・達成状況	評価	次年度への方策
⑤ 安全・安心な環境づくり	教務部	○ 個別の教育支援計画や指導計画、成績処理等、教務に関する作成文書の年間スケジュールが明示されておらず見通しが持ちにくい状況が見られる。	○ 見通しを持って業務を進め、ゆとりを持って児童生徒の指導・支援をおこなうことにより、児童生徒が落ち着いた学校生活を送ることができる。	○ 児童生徒の指導支援に係る作成文書を精選する。 ○ 年間スケジュール表を作成し、職員に提示する。 ○ 業務の進捗状況を把握して、適切な声かけを行う。	A: 年間スケジュールを作成し、見通しを持って業務が進められている。 年間スケジュールを作成し、周知されているが、見通しを持った業務が進められていない。 B: ない。 C: 年間スケジュールを作成したが、周知が不十分である。 D: 年間スケジュールが作成できていない。			
	指導部	○ 児童生徒の実態が多様化し、その意義を理解した上での避難訓練や安全教育をどのように行うかが課題である。 ○ 安全点検をして危険な場所・物のチェックをしているが、時々生徒が転ぶなどの状況も起こっている。	○ 教職員は安全教育の重要性を認識して、指導、環境整備をすることにより、児童生徒が安全な生活を意識した生活を送ることができる。	○ 日々の授業や活動、行事の中で、安全を意識した指導に取り組むとともに、安心安全な環境づくりに取り組む。	A: 安全を意識した指導により、児童生徒は危機回避行動が自主的に取れている。 B: 安全を意識した指導により、児童生徒は危機回避行動が取れるようになっている。 C: 安全を意識した指導により、児童生徒の行動に変化が見られつつある。 D: 安全を意識した指導に取り組むことが出来ていない。			
		○ 年々、児童生徒数も減少傾向にあり、学校生活の中で多くの人と接し、活動する機会も限られてきている。 ○ 人権が尊重された環境の中で、人との関わりを通して自己肯定感を高め、安心して学校生活が送れるようにしていく必要がある。	○ 学校が、安心して過ごせ、学べる場となるよう、人権尊重の視点に立った環境の整備を行い、児童生徒、保護者の信頼感のもとで、学校運営を行うことができる。	○ 教職員が積極的に挨拶をすることで、児童生徒と教職員、児童生徒同士が自己存在感を高める雰囲気为学校全体に広げていく。 ○ 個を大切にた掲示物、校舎内外の整理整頓など美しい環境づくりを行っていく。 ○ 「学校だより」、「学級だより」、ホームページなど学校の様子について情報を提供する。	A: 人権尊重の視点に立った環境整備を行い、児童生徒が落ち着いて日々の学習や活動に取り組んでいる。 B: 人権尊重の視点に立った環境整備が不十分であるが、児童生徒が落ち着いて日々の学習や活動に取り組んでいる。 C: 人権尊重の視点に立った環境整備は行ったが、児童生徒が落ち着いて日々の学習や活動に取り組めていない。 D: 人権尊重の視点に立った環境整備が不十分であり、児童生徒が落ち着いて日々の学習や活動に取り組めていない。			

総合評価の基準 A:十分達成 B:概ね達成 C：変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し